

# クリティカルケア領域における 家族看護の研究動向 —質的研究と量的研究の文献の比較— (★タイトル変更しました)

いとうたけひこ(和光大学)

迫田典子 城丸瑞恵(札幌医科大学大学院)

日本計算機統計学会  
テキストマイニングスタディグループ 研究会

2012年7月10日(火)14:00-17:00  
数理システム セミナールーム

# I. 緒言 1 クリティカルケアと家族

- クリティカルケアを受ける患者は、生体侵襲の大きい手術後の術後管理や、急激な病状の発生および悪化のために集中治療を受ける。
- 家族もまた心理的な危機状態にある。クリティカルケアに携わる看護師にとって、家族に対する援助も重要な役割である。家族の一員が生命の危機状態に陥ることは、家族全体の統合性を大きく揺るがすものであり、家族システム全体の危機である。
- 日本集中治療医学会は、2005年の「集中治療に携わる医師の倫理綱領」を反映して2011年5月に「集中治療に携わる看護師の倫理綱領」を策定した。この中で「集中治療領域における終末期患者家族のこころのケア指針」が発表され、倫理の視点よりクリティカルケア領域の家族支援の必要性を強調した。

# I. 緒言 2 クリティカルケアと家族の看護研究

- しかし臨床の場面では、十分な支援が実施できていない状況にあると考える。
- 理由として救急現場の看護では、多くのエネルギーが患者の救命のために用いられ、家族の援助が後回しにされがちになる。
- また病状の経過によって、家族が患者の代わりに治療の意思決定を担う役割があり、それに対する支援の困難性や苦手意識を持つ看護師がいることが予測される。
- このような背景から、クリティカルケア領域の家族看護についてより具体的な方法の確立が望まれる。
- クリティカルケア領域の家族看護の質的向上に対する基礎的資料とするために、これまでの研究動向と今後求められる研究内容について明らかにすることを目的とする。

# Ⅱ. 方法 1. 分析対象

- 医学中央雑誌データベースWeb版 (Ver.5)を使用
- 1985年から2011年までの27年間に学術誌で発表された原著論文を対象とした.

条件式:

- クリティカルケアand家族看護(51件),
- クリティカルケアand家族介入(1件),
- クリティカルケアand家族支援(51件),
- ICU and家族看護(269件),
- ICU and家族介入(6件),
- ICU and家族支援(271件),
- CCU and家族看護(20件),
- CCU and家族介入(0件),
- CCU and家族支援(18件),

- SCU and家族看護(3件),
- SCU and家族介入(0件),
- SCU and家族支援(3件),
- HCU and家族看護(6件),
- HCU and家族介入(0件),
- HCU and家族支援(7件),
- 救急看護and家族看護(96件),
- 救急看護and家族介入(5件),
- 救急看護and家族支援(96件),
- 緊急入院and家族看護(120件),
- 緊急入院and家族介入(1件),
- 緊急入院and家族支援(122件),
- 重症患者and家族看護(29件),
- 重症患者and家族介入(0件),
- 重症患者and家族支援(29件)であった.

# (つづき)

- 調査時期は2012年3月.
- 対象となる論文のうち, 1994~2000年は4件のため, 今回はクリティカルケア領域における認定・専門看護師の教育が開始されだした2000年以降を研究対象時期とする,
- すなわち2001~2011年に出版された105件の原著論文を分析対象とした. それぞれの条件式で重複して抽出した文献は1件とみなしている. 次に, 抽出した文献は質的研究と量的研究に分類してその相違を分析した.
- なお, 看護の特殊性により小児・母性看護領域を除き成人・老年看護領域を対象とした.



# テキストマイニングによる分析

- まず論文タイトルをテキスト化し, Text Mining Studio Ver.3.2により, テキストマイニングの手法を用いて内容語の分析をおこなった. 1論文を1行として入力した.

## 分析手順

- (1)テキストの基本統計量(基本情報),
- (2)単語頻度分析:テキストに出現する単語の出現回数をカウント
- (3)特徴語分析:データに付随する属性ごとに, 特徴的に出現する単語を抽出することであり, 質的研究と量的研究別々に文献タイトルの頻出単語の比較を行い研究手法によるタイトルの傾向を把握した

### 3. 研究手法別の特徴の関する分析

- テキストマイニングの分析結果，質的研究で用いられていた頻度の多い単語と量的研究で用いられていた頻度の多い単語の研究動向を把握するために，論文内容を確認してその相違について分析した.

### 4. 海外研究との比較

- 海外における研究動向との比較を行うため，CINAHLで「critical care」and「Family」，「emergency care」and「family」+査読式の論文+筆頭者を看護師として1985～2011年の26年間で検索を実施し，質的研究と量的研究の数，内容について明らかにした.

## IV. 結果1. 研究数の年次推移と研究対象

- 2001年～2011年105件の年次推移は表1のようになった。2001年以降に急激に増加しており、2006年以降毎年10件前後の発表が行われている。質的研究では2006年以降毎年7件前後の発表されている。量的研究では2005年より毎年6件前後発表されていたが2010年より減少傾向である。質的研究と量的研究数の差は年度によりばらつきがあるが総数では殆どない状況である。研究対象者は家族64%、看護27%、家族・患者は6%、論文研究が3%であり、患者を含めた研究は行われていなかった。



表A. 研究の年次推移（左側は2000年まで、右側は2001－2011年）

年	研究数	質的研究	量的研究	年	研究数	質的研究	量的研究
1994	1	0	1	2001	8	2	6
1996	1	1	0	2002	2	0	2
1998	2	2	0	2003	6	3	3
合計	4	3	1	2004	5	4	1
				2005	6	1	5
				2006	13	9	4
				2007	15	7	8
				2008	17	8	9
				2009	13	7	6
				2010	12	8	4
				2011	8	6	2
				合計	105	55	50

## IV・結果 2. 発表誌

- 発表掲載数が多い上位5件は、日本看護学会論文集・成人看護 I，日本クリティカルケア看護学会誌，日本救急医学会雑誌，日本救急看護学会雑誌，日本看護研究学会雑誌でクリティカルケア領域の看護学会誌に多く掲載されていた。

表B. クリティカルケア領域における家族看護に関する研究発表が多い掲載誌件数（上位5件）

掲載雑誌名	
日本看護学会論文集: 成人看護 I	61件
日本クリティカルケア看護学会誌	9件
日本救急医学会関東地方会雑誌	8件
日本救急看護学会雑誌	5件
日本看護研究学会雑誌	4件

## IV. 結果

### 3. 文献のタイトルのテキストマイニング

- 1)基本情報
- テキストマイニングの分析において、原著論文の題名における基本情報より、対象論文105件中、題名の文字数の平均は25.5文字であった。内容語の延べ単語数は701で、単語種別数は370種類だった。
- ★タイプ・トークン比は0.528と比較的高い。

## 2) 単語頻度分析

- 単語頻度分析とは、テキストに出現する単語の出現回数をカウントすることによる分析である。表 2 は単語頻度分析であり、左側は105件の論文タイトル中で全体頻度が6以上の単語頻度表を表している。「家族」は38個、「患者」は21個、「ICU」20個、「ニード」「看護師」は17個、「患者家族」は13個、「分析」は12個、「家族援助」10個、「緊急入院」「思い」は8個、「援助」「家族看護」等がそれぞれ7個、「ICU入室患者」と「コーピング」等がそれぞれ6個だった。
- 表2の右側は論文タイトルの中で全体頻度が3以上の単語頻度表を表している。質的研究では「患者」21個、「援助」7個、「家族」38個、「緊急入院」「思い」が8個、「インタビュー」「研究」等が3個であった。量的研究では「ニード」17個、「ICU入室患者」「重症患者家族」「調査」6個、「看護師」17個、「ニーズ」「満足度」5個等であった。

表D. 質的研究における論文タイトルに特有な単語頻度

単語	品詞	全体頻度
患者	名詞	38
援助	名詞	21
家族	名詞	20
緊急入院	名詞	17
思い	名詞	17
インタビュー	名詞	13
研究	名詞	12
行う	名詞	10
体験	名詞	8

表E. 量的研究における論文タイトルに特有な単語頻度

単語	品詞	全体頻度	単語	品詞	全体頻度
ニード	名詞	17	違い	名詞	3
ICU入室患者	名詞	6	情報提供	名詞	3
重症患者家族	名詞	6	対応	名詞	3
調査	名詞	6	家族援助	名詞	10
看護師	名詞	17	コーピング	名詞	6
ニーズ	名詞	5	集中治療室	名詞	6
満足度	名詞	5	ICU入室患者家族	名詞	4
現状	名詞	6	試みる	名詞	4
検討	名詞	7	実態	名詞	4
認識	名詞	7	面会時	名詞	4
アンケート調査	名詞	3	用いる	名詞	4

2012/7/10

### 3)特徴語分析

- 特徴語分析とは、群において特徴的に出現する単語及び係り受け表現を抽出する分析である。補完類似度を用いて特徴語を表している。
- 質的研究に特有な単語では「思い」「緊急入院」、量的研究に特有な単語では「ニード」や「調査」といった単語がみられた。

#### 4. 研究手法別におけるタイトルの内容の分析

##### 1) 質的研究: 「思い」「緊急入院」がタイトルに含まれている論文

- タイトルに「思い」「緊急入院」「思い」+「緊急入院」が含まれている論文はそれぞれ5件, 7件, 2件であった.
- 研究対象者は「思い」では家族3件, 看護師2件, 「緊急入院」では家族4件, 看護師3件, 「思い」「緊急入院」では家族2件であった.
- 内容は「思い」では, 入院前から入院後までの家族の思い3), 医療者に不信を抱く家族の思い4), などであった. また看護師を対象として終末期の家族への思い5)や入院中の家族への精神的な思い6)に対するものがみられた.
- 「緊急入院」では, 家族の医療者に対するニーズ7), 緊急入院した家族の心理を推測する8)ことであった. 看護師の予期悲嘆への支援9), 介入全般10)に関する研究もみられた.
- これら多くは半構成面接を用いて行い内容分析を行い研究対象が家族と看護師であり, 患者を対象とした研究は行われていない.



## 4. 研究手法別におけるタイトルの内容の分析

### 2)量的研究:「ニード」「調査」が含まれている論文

- タイトルに「ニード」、「調査」、「ニード」+「調査」を含んでいる論文は、それぞれ15件、9件、2件であった。
- 対象者は「ニード」では家族14件、看護師1件であった。「調査」では家族7件、看護師1件、家族と看護師双方を対象(以下家族・看護師対象)とした研究が2件であった。「ニード」+「調査」では家族・看護師対象が1件だった。
- 「ニード」では患者家族のニードに対する内容が多く、家族の満足度調査11)、CNS-FACEスケール12)等を用いて家族のニードを把握していた。看護師対象の場合も家族のニーズに対する看護師の認識を把握していた13)。「調査」では家族対象の場合、面会時に看護師に求めているニード14)や緊急入院後の支援について家族への満足度調査15)での内容が多かった。
- 看護師を対象とした研究ではエンゼルケアの現状と課題について16)。
- 家族・看護師対象では、ICU・HCUでの肺がん手術直後の面会時における看護介入17)や看護ケアマニュアル作成のために家族看護に対する家族と看護師の思い18)についての調査であった。「ニーズ」「調査」では看護師の支援が家族のニーズに沿われているかMolterの重症患者家族のニードを用いてアンケートを実施していた19)。質的研究同様、家族看護に関連した患者を対象とした研究はみられないことが示された。

# 5. 海外におけるクリティカルケア領域での家族看護に関する研究の検索結果

- CINAHLでの分析結果では2009年以降に文献数が増加している。特に2010年は31件であった。研究方法別では2009～2011年の3年間で質的研究34件、量的研究が19件、トライアギュレーション1件であった。研究対象者は家族25件、看護師2件、患者が5件。内容として質的研究では、集中治療室での家族のニード把握20)、外傷患者家族の経験21)、看護師の体験22)や介入方法の検討23)に関して半構成面接法を用いた研究が多数を占めた。量的研究では医療に対する満足度24)、終末期患者の家族のケア25)について既存及び独自の測定ツールを用いていた。患者を対象とした研究はICUで人工呼吸器装着中における家族の存在について26)、面会時間や面会中の家族への満足度について調査を実施していた27)。

## 6. 日本における量的研究から質的研究の論文数バランスの変遷

- 2001年～2011年の105件を3つの時期に区分して質的研究と量的研究の比率を検討したところ量的方法優位の時代から質的方法優位の時代への移行が見られた。
- 2001年～2005年では質的研究10件(37%), 量的研究17件(63%)で量的研究が優位だったが,
- 2006年～2008年では質的研究24件(53%), 量的研究21件(47%)とほぼ同数となり,
- 2009年～2011年では質的研究21件(64%), 量的研究12件(36%)と比率が逆転して質的研究の件数が量的研究のほぼ2倍となった。
- Cramer の  $V = .201$  (相関係数に相当)であった。これをノンパラメトリックの順位尺度によるSomersの  $d$ により検定したところ,  $d = -.164$ , 近似有意確率  $p = .037$ で有意であった。
- 残差分析をすると2001年～2005年では量的研究の比率が大きく, 2009年～2011年では質的研究の割合が大きいう傾向が明らかになった。

# V. 考察

## 1. 年次的推移による研究傾向

- 2001年以降増加し始めており、特に2006年以降は年間10件前後の発表が行われている。要因として1994年に家族看護学会設立、2000年前後よりクリティカルケア領域での認定・専門看護師の養成が開始、家族看護の必要性の認識が高まってきたと考えられる。
- 質的研究と量的研究の発表数は全体ではほぼ同数
- 時代別では、量的研究が盛んな時代(2001年～2005年)から、質的研究優位の時代(2009年～2011年)へ移行した。
- クリティカルケア領域における高度実践看護教育の開始直後の時期は、家族の実態や看護介入の現状を把握するために、客観的データが得られる量的研究優位がであったのだろう。その後、高度実践看護教育開始後10年が経過した。それに伴って、今までに得られた研究内容や看護介入の評価や今後の課題、方向性について明らかにするため質的研究が盛んになったと推測される。

# (つづき)

- 質的研究の場合、家族の心理面・社会面に関する理解や看護師の支援内容に関する評価について多く行われていた。
- 量的研究の場合、はじめの頃は家族のニードを把握するために海外で開発されたニード測定尺度を用いている内容が多かった。しかし徐々に山勢らが開発した「CNS-FACE 家族アセスメントツール」が、新しい測定尺度として浸透してきている。看護師自身を対象とする研究では家族看護の実際について、質問紙を用いた調査が多かった。
- 家族と看護師の両方を対象とする研究の場合、論文件数は7件とまだ少ないことが明らかとなった。今後は研究対象として、双方の関係を研究内容上において考慮していく必要があると考える。

## V. 考察

### 2. クリティカルケアにおける家族看護の掲載誌

- 家族看護に関する論文の掲載誌は、クリティカルケア領域の学会誌が上位4位
- クリティカルケア看護学会が2004年設立後は、ほぼ毎年掲載されてきている。それに加えて、現在では、多くの学術誌でクリティカルケア看護の論文が発表されている。
- 研究発表の場が拡大してきていることが本研究から明らかになった。

# V. 考察

## 3. 質的研究と量的研究のタイトルの対比

- 質的研究では、「緊急入院」「思い」をタイトルにした研究が多くみられた。「緊急入院」は家族にとって突然の出来事で、家族の組織力を低下させる状況的危機に陥るため入院時より看護介入が必要となる。「思い」は入院後の経過が急変しやすく、家族も動揺して、かつ入院前後の情報も少ないことから介入を困難にさせる要因となるため適切な介入を行うために研究が多いと考える。また、個別性があり測定が難しいので、インタビューを用いて質的に個々の事例の様相を探索的に明らかにした研究が行われていることが見いだされた。
- 量的研究では「ニード」「調査」を題名にした研究が多くみられた。「ニード」は入院期間中の家族の心理状態について測定尺度を用いて把握し明らかにした研究が多く、看護介入の基礎情報として捉えていた。「調査」はクリティカルケアの様々な状況下における家族、看護師の意識調査や満足度を明らかにしていた。つまりニードや家族看護についての現状を把握するために測定尺度を用いることで客観的に捉えられる。また他の研究の結果と比較することが出来るため、研究結果の信頼性が得られることより量的研究手法で研究が行われていることが見出だされた。
- 質的研究では「患者」、量的研究では「ICU入室患者」が含まれた論文タイトルが見られたが、論文内容をみると研究対象に含まれていなかった。今後は患者の視点からみた看護師の家族支援に対する評価、家族への思いについての研究を行うことで、多角的に家族介入方法について明らかになると考える。

# V. 考察

## 4. 海外のクリティカルケアの家族看護に関する文献と和文文献との比較

- 質的研究では集中治療室での家族の心理的側面に関する研究が多く、緊急入院という状況に関する研究は少なかった。特殊な治療環境が患者及び家族に及ぼす影響を明らかにしていたことが特徴的であった。
- 量的研究では測定ツールを用いて家族への情報提供に関する研究が多く、情報及び保証のニードが充足出来ることで家族が危機的状況を回避出来ると認識され、介入方法に結び付いていると考えられる。
- 海外と日本における研究対象の相違の要因として、患者は家族成員の中の一人として捉える日本と、患者は家族成員の一人ではあるが、個人として捉えている海外での家族の認識の違いが研究対象選定に影響している。これは海外文献の特徴的な部分であり、日本での家族介入に求められる新しい視点になる。
- 質的研究と量的研究との比率を海外と比較すると、日本における2009年～2011年は質的研究の割合が量的研究のほぼ2倍であり、海外の比率とよく相似しているという傾向が確認された。



# V. 考察

## 5. 本研究の限界と今後の課題

- 本研究は論文タイトルに基づき質的・量的研究手法別に研究動向を概観した。次に各手法別に論文内容を確認した。これまでの研究の傾向と今後クリティカルケア領域に必要な家族看護の研究の方向性が明らかになったことは意義がある。
- しかし個々の論文の詳細な論文内容の分析には踏み込んでいないため限界がある。
- 今後の研究の発展方向として、研究対象には家族、看護師に加え患者も含め、その関係に留意した研究を行うことで家族への介入及び支援方法がさらに具体的に明らかになることが期待される。

## VI. 結論

- 1. 日本のクリティカルケア領域における家族看護の研究は過去27年間に109件であった。研究数は2001年以降増加しており研究手法は、初期には質的研究が優位であったが、2009年～2011年には質的研究が盛んに行われるようになった。質的研究では「思い」「緊急入院」量的研究では「ニード」「調査」を含むタイトルが特徴であった。
- 2. 発表された学術雑誌上位4件はクリティカルケア領域の看護学会であり、今後は発表の場が拡大していくと考えられる。
- 3. 海外の研究では2009年以降より急激に増加し、質的研究が量的研究の数を勝り、この傾向は同時代の日本と共通していた。質的研究では家族の心理的側面について、量的研究ではニードについて既存または独自のツールを用いた研究が多かった。研究対象は患者も含めた研究も存在していた。
- 4. 日本でも、今後は患者と家族と看護師の関係に留意した研究を行うことで、多角的な視点より効果的な支援方法が導き出されるために必要である。